

暦の上では「春」になっても、自然界は、春と冬が共存している時期があります。学校を訪問した際には、季節感も実感も大切にした俳句授業を展開しています。

気持ちのよい青空に恵まれたある日の学校訪問です。授業のはじめに「季節を感じたこと」をこどもたちに問いかけました。ある児童が「朝、学校の門を入ったところで、霜柱を見つけた」と教えてくれました。「ぼくも見た」「私も見ました」という発言の中に「えー、見てないよ」という声もあがり、「もう霜柱は溶けてしまったかもしれないけど、校庭へ行ってみましよう」ということになりました。



校庭に出てみると、紅白の梅の花の香りに気付く児童、「霜柱、あったあ!」「地面が暖かい!」と叫ぶ児童等々、様々でした。

「歳時記」では「霜柱」は冬、「梅の花」は春の季語ですが、実際に目の前にあるものは、季語が重なってもよいと思います。

こどもたちは、澄んだ空気の中、降り注いでいる日差しで温まった芝生を体全体で感じとっていました。思わず、寝転んでしまう児童もいました。「気持ち、いい!」「楽しい!」と言いながら俳句を作っていました。

そのまま、校庭で車座になって、俳句発表会をしました。その時、こどもたちが詠んだ俳句です。

- 『友だちと芝生でごろん春の風』
- 『梅の花すっぱい香り鼻がツーン』
- 『校庭で霜柱ふむ梅の花』
- 『青空に重なり咲いた白い梅』
- 『手の平で輝いている梅の花』

自分の学校の良さを満喫しているこどもたちでした。

